本と地域の情報誌

県北 どらくろあ

第20号　2017年11月1日（毎月1日発行）

県北群星伝⑫ 村の郷土研究家

高柴順紀（たかしばとしのり） 74歳（庄原市東城町）

「わたしは学者ではありません。ただ、自分が興味を持ったことを、暇なときに調べているだけなんです」

菊栽培農家の高柴順紀さんは謙遜するが、高柴さんが調べている事物は、郷土史を含めて多岐にわたる。文献や書籍になっているものをいくつか紹介しよう。

鳥取大学教育学部地学教室の赤木三郎教授（当時）との共同研究である「広島県東城町川東産の中新統植物化石」は「鳥取大学教育学部研究報告 自然科学第31巻（一九八二年十月）別刷」に掲載された。東城町の文教地区の敷地造成作業で出た化石を、赤木先生と一緒に調査したものだ。鳥取大学は高柴さんの母校であり、同じ東城町出身の赤木先生とは在学中から親交があったという。

とくに化石に興味を持っていたわけではなかったが、一度専門家に見てもらおうと赤木先生に出土した化石を送ったことで、共同研究がスタート。施工業者の許可を得て、工事の休みの日に二人で、あるいは高柴さん一人で、こつこつと化石を採取、マングローブ林沼特有の貝類の化石を確認した。この地方に、中新世紀中期の一時期、熱帯～亜熱帯の気候環境が存在したことが明らかになった。

別冊太陽「祭礼――神と人との饗宴」（平凡社二〇〇六年一月発行）では、編者の和光大学表現学部教授、山本ひろ子氏の現地取材をサポート。自身も東城町田黒地区にある「小原名」の地祭り（荒神祭り）を、詳細に紹介している。

そのあとの頁に掲載された高柴さんの「大神楽復興顛末記」は、まるでドラマのような面白さだ。「子供の頃見た大神楽がもう一度見たいよのう」というクラス会での誰かの一言から、地域をあげての騒動に発展。三十年ぶりのことなので、道具を稲藁で作るところから手探りだったが、村の伝統文化は見事、復活する。

高柴さんは、農家の一人っ子として生まれた。農家の後継者として経験を積むために、鳥取大学在学中に、長野県の八ヶ岳の麓にある農家で研修を受ける。郷里と同じ高冷地ということでその土地を選んだ。そこで栽培されていたのが菊だった。時代は昭和四十年代に入って、日本は高度経済成長期に突入、農家には減反が課せられて、米以外の作物を模索している時期だった。

長野の農家の標高は八百メートルぐらい、東城の郷里の標高は六百メートルぐらい。寒暖の変化の大きい土地は、菊栽培に適している。福山に、菊の育種や苗の販売を手掛けている精興園（現・イノチオ精興園）という会社がある。東城町出身の女性が嫁いでいて、息子さんが同年代ということもあって、高柴さんは精興園に足しげく通い、本格的に菊栽培の勉強＆研究を始めた。

たった一人で始めた菊栽培だったが、徐々に仲間が増えて、今では十五戸が東城菊組合に加盟、高冷地で育てた菊は高品質で日持ちが良いと、名産になっている。

菊に関する文献で、キクスイカミキリという害虫の存在を知り、カミキリムシの専門家である中村慎吾さん（本誌で「虫と草木と人々と」を連載中）の自宅を訪問、交流が

が始まった。

菊畑に集まる蛾を持参したところ、これはおもしろいということになって本格的に誘蛾燈を設置、採集した膨大な蛾を中村さんが標本にした。この共同研究は「庄原市東城町森に設置された誘蛾燈で捕集された蛾類」というタイトルで、「比和科学博物館研究報告」（第57号二〇一六年二月）に掲載されている。

「仕事以外の、プラスαの時間が大切だと思っています」

古い文献を収集したり、興味のあるものを調べるのが楽しくて仕方がない。

「伊能忠敬がこの辺りを測量しているんですよ」

あの「大日本沿海輿地全図」を完成させた伊能忠敬である。「伊能忠敬測量日記」に明記されている。その日記によると、測量とは別に、伊能はわざわざ一日をかけて帝釈を探訪、特別に興味を持っていたことが推測される。

赤木先生とふたりで、伊能忠敬の東城地域での行程を、実際にたどってみるという計画を実行中、三年ほど前に赤木先生が亡くなって中断している。その続きを、娘の赤木里香子さん（岡山大学大学院教育学研究科教授）が引き継ぐという。『共同研究』の再開を、高柴さんは楽しみにしている。

図書館員ノート⑮

「子どもと本と私と」

私は母になって五年目、二人の子どもを育てている図書館職員だ。

この仕事をはじめて一年半を過ぎたところである。

図書館には、子どもたちと関わる仕事がいくつかある。

「絵本の宅急便」では、市内の保育施設に定期的に本を貸出し届けている。ところによっては、「よみかたり」も行う。

「よみかたり」は、事前準備をする。十五分間のミニお話会のための本や紙芝居を担当職員それぞれが用意する。季節や行事等を考えて選ぶ。大型絵本も人気だ。子どもたちの背丈の半分くらいあり、大きいことだけでも喜んでもらえる。そして、練習も大事だ。

私の「よみかたり」デビューは、息子たちの通う保育園だった。

初回は先輩と一緒に訪問した。よみかたりの前に、「はじまるよ♪」という歌を手遊びしながら歌う。先輩は慣れた様子で紙芝居を読んだ。私は、『ぴょーん』（まつおか たつひで作・絵）という大型絵本を読んだ。最後は「ぴょーん」と一緒に言ってもらい、みんなでジャンプ!!楽しそうにジャンプする子どもたちの姿が印象的だった。

デビュー日の息子のはにかみ顔は今でも忘れられない。

たまに自宅で「よみかたり」の練習をする。上の子はテレビを見ていても気づけば聞いてくれる。下の子はひざ上に座り直し「もう一度読んで」とリクエストする。

文字が読めないはずなのに、兄弟で読み聞かせをしていた時は笑ってしまった。

日々、子どもと一緒に過ごす時間は長くない。

だから自然と本が好きになってくれていることがうれしい。

最近の「絵本の宅急便」では、「心から」どうやったら楽しんでもらえるかな?と、考えることも増えてきた。

こんな風に私の本との関わり方が変化してきたのは、子どもがいてくれるからだろう。

子どもの成長とともに、母として図書館職員としても日々成長していきたい。

三次市立図書館　F・M

司馬遼太郎『坂の上の雲』
――「明治」という不思議な時代

司馬遼太郎の作品のなかでも2千万部を超える最大のベストセラーになっているのが大長編『坂の上の雲』（文藝春秋版・全6巻、同文庫版・全8巻）です。どちらかというと地味な登場人物なのに、なぜこんなに人気を博したのでしょうか。

「日本騎兵の父」といわれた陸軍大将の秋山好古（よしふる）、その弟で日露戦争の日本海海戦を勝利に導いた名参謀・真之（さねゆき）、さらに郷里の友人で短歌、俳句改革を果たした正岡子規の3人を軸に、明治の群像を描いています。群像というより、日清戦争から日露戦勝利に至る明治という時代そのものを浮き彫りにしています。

よく言われるのは、それまでの「時代小説」を、司馬遼太郎が「歴史小説」に変えたことです。架空の人物を主人公にして痛快に描くことが多かったそれまでの小説に対し、実在の人物を配し、背景としての史実を資料で綿密に再現したのです。この作品についても、全くその手法です。

3人は、江戸最末期の四国・伊予松山藩の武士の家に生まれます。松山藩は幕府方だったので、明治になると家禄は取り上げられた上、明治政府への仕官の道はなく、多くが「学問」で道を切り開こうとします。秋山兄弟も、学費の要らない陸軍士官学校、海軍兵学校へとそれぞれ進みます。

ここに描かれている明治政府は、薩長を中心とした寄り合い世帯の貧弱な財政規模のため、走りながら教育制度を整えていきます。いわばゼロからのスタートなので“高度成長”期でもありました。人々は困窮のなかで、それぞれに未来を描いて「何クソ」と頑張ります。頭上にぽっかり浮かぶ雲をめざし、坂を登る時代だとみて、この題名がつけられたようです。

作品は、3人が交錯しながら展開し、さらにその周辺におびただしい人物が登場し、さながら明治という時代を散歩している気分になります。3人は天才的ではなく、ちょっとした変人風に描かれていて親しみがもてました。子規はわが道を行き、秋山好古は茫洋とした青年、弟の真之は腕白少年から身をおこします。

多くの紙幅が費やされているのは日露戦争です。第2巻の終わりには、早くも「開戦へ」の項目が顔をみせます。世界情勢、外交から軍部の動き、部隊の戦略、日本海海戦の戦陣まで、ここに明治が凝集されているといわんばかりに描かれます。大国ロシアの無敵艦隊を相手に東洋の「百姓国家」の日本が勝つなどとは、欧州では誰も予想していなかったからです。

「あとがき」も見逃せません。執筆余話というだけでなく、司馬遼太郎の明治をめぐる文明論になっています。ことに文庫本では、5編が追加されています。「このながい物語は、日本史上類のない幸福な楽天家たちの物語である」というのが作者の言葉です。積み重ねられる一つ一つの史実に、なんとも味わい深いものがあります。明治という時代は、人間の“進取の気象”を最大限に活用したからなのでしょうか。

私は、こんな読み方で『坂の上の雲』を堪能しました。

また読んでみたい本⑳
――――青年たちに

音谷 健郎

【花神 表紙】

古今東西の文学にはたくさんの名作があります。そんな名作の中から筆者の心に残る作品を今の青年たちにも読んでもらいたいと思い、毎月１冊ずつ紹介しています。

第20回は、司馬遼太郎の『坂の上の雲』です。もし興味を持ったらぜひ読んでみてください。

筆者紹介：1944年、旧･庄原町生まれ。新聞記者、大学講師を経て現在、庄原市東本町在住。大阪文学学校講師

虫と草木と人びとと⑧　中村慎吾

「山の歳時記・秋」

著者紹介：一九三一年、比婆郡（現・庄原市）比和町に生まれる。農学博士（九州大学）。昆虫や動植物などの自然科学、郷土史や民俗学を含めた博物学の研究者で、著書は多岐にわたる。

※中村さんの回想録的なコンセプトで編纂された「虫と草木と人びとと」（シンセイアート出版）から、著者の許可を得て、その一部を抜粋、転載しています。

ツキヨタケを食べる知恵

秋は「ナバ（きのこ）採り」の季節。黄葉し始めたブナ林にナバを求めて歩くと、立ち枯れの幹に見事な群生を見ることがある。この、色もツヤもシイタケそっくりの群生は、猛毒のツキヨタケである。ブナの立ち枯れには食べられるヒラタケも生えるので、よく間違われる。キノコ中毒事件の大部分はツキヨタケによるものである。

「ブナにはミズホとクマビラが生える。ミズホはすぐ汁にしても煮物にしてもええが、クマビラは毒抜きしてから食べるんで。むかし、クマビラに中（あ）たった母親の乳を飲んだ赤子も中たって、難儀をしたそうな……」

山の古老の話である。

ミズホとはヒラタケ、クマビラはツキヨタケのこと。猛毒のツキヨタケを県北の山地では食用としてきたのである。実は私も知人から、毒抜き済みのをいただいたことがある。シイタケよりもずっと肉厚で独特の食感があり、なかなか美味であった。

ツキヨタケは群生するので、一本の立ち枯れから大量に採取できる。長い冬に備えるものとしては、恰好のものである。おそらく幾度となく中毒を体験しながら、大量の塩に漬けてから谷川の水に何日もさらすという、山国ならではの毒抜きの方法を編み出したのであろう。それは都会では決して真似のできぬ素晴らしい生活の知恵であり、森林文化そのものともいえる。

自然離れが進み、急速に自然とつき合う知恵が衰退しているこのごろ。ナバ採りを楽しみながら、先人たちが編み出した森林文化に思いを巡らしてみてはどうだろう。

ツキヨタケ
（高野町木地にて小川光昭撮影）

極彩色の「キノコ」の正体

紅葉も終わりに近づき、奥山ではもう木々が葉を落として冬を迎えようとしているころ、瀬戸内沿岸のごく一部に残る、タブノキやクロキなどの常緑樹に覆われた山は、青々としたまま、初冬の日差しを受けて静まり返っている。

常緑樹の茂る林は、厚い葉で日差しをすっかり遮っているので、中は不気味なほど薄暗い。その薄暗い林とは対照的に明るい派手な色をして、キノコと見間違える奇妙な姿をした植物が、まれに落ち葉の中から頭をもたげている。ツチトリモチである。

ツチトリモチはキノコの仲間ではない。キノコの傘を思わせる部分は、微小な花が穂状に固まっているところで、れっきとした種子植物である。花は雌花ばかりで、雄花はまだ見つ

かっていない。いったいどうやって種を作っているのか、謎なのである。葉はすっかり退化して茶色の鱗状になり、クロキなどの根に寄生している。光の差し込まない林床に見事に適応した姿といえるだろう。

そもそも鳥もちというのは、モチノキなどの樹皮に含まれているねばねばした物質で、昔はこれを集めて、小鳥を捕らえるのに使っていた。ツチトリモチの根からも、鳥もちを作ったようで、「土中にある鳥もち」の意味から名付けられたらしい。ただし、広島の場合はツチトリモチがまれにしかないこともあって、鳥もちを作ったという伝承はない。

赤い花穂がいっそう鮮やかさを増し、花盛りとなるころ、瀬戸内の山々も冬となる。

ツチトリモチ
（元宇品にて小川光昭撮影）

どら書房 委託販売コーナー

★「天馬書林」
新書の教養書や人生指南本、ノンフィクションが充実。

★「サワちゃん文庫」
中国、日本の歴史書、思想書が中心のラインアップ。

各専用棚で好評販売中！

”がらくた座ちいおばさんの人形劇”

■2017年 11月 11日（土）
■14時開演　会費は無料！
■会場 庄原市ふれあいセンター
（庄原市西本町 4-5-26）

長野県松本市から、
がらくたから生まれた人形たちとちいおばさんがやってきます。
こどもから大人まで一緒に楽しく遊びましょう！
大人でも観たい、大人にこそ観てほしい人形劇です。

■主催＆問い合わせ　子どもと一歩の会（松本 090-8463-8274）
■後援　庄原市教育委員会

「ラッパの神様」

――現代御伽草子⑲

亜木冬彦（あきふゆひこ）

※県北の歴史や風物を題材としたファンタジー小説です。

（うん？　まさかな）

食堂に入ると、テーブル席にいる巨漢の姿が目に入った。むさくるしい顎髭を生やした外人だ。ビール瓶が何本も並んでいる。

「焼き鯖定食」

いつものカウンター席について、お茶を飲んでいるときだった。肩をたたかれて振り向いたら、あの外人が立っていた。にっこり笑って、わたしに空のグラスを強引に押し付けた。有無を言わせず、グラスにビールを注いだ。

早口で英語をまくしたてられた。唖然として聞いているしかなかった。最後に空になったビール瓶をわたしの前に置いて、空いている左手をごつい両手で握られた。ぶんぶん振られて、最後のサンキューという言葉だけ聞き取れた。

結局わたしは、その外人が店を出て行く姿を見送るだけで、一言もしゃべることができなかった。ビールの入ったグラスを恨めしそうに見ながら、昼飯を食べた。車で来ていた。

会計の金額に驚いた。あの外人が飲み食いした金額が入っている。わたしが来る前からあの外人は、友人と待ち合わせていると店主に説明していたらしい。それでビールを飲みながら、人の良さそうなカモが入って来るのを待っていたわけだ。黙って全額払った。

店の外に出ると、駐車場の片隅に、あの食い逃げの外人が膝を抱えて坐っていた。飲み過ぎて、歩けないのだろうか。そばに寄ると、哀しそうな目でわたしを見上げた。

「警察を呼んだか？」

流暢な日本語だった。

「ご馳走するよ」

皮肉な笑みを浮かべた。

「日本人はお人良しだな」

わたしは苦笑を浮かべて、彼の隣に腰を下した。

「マイク・スタンパーだろ？　体調を崩して入院しているんじゃなかったのか？」

アーバン・ブルースの帝王、マイク・スタンパー、わたしは昔からのファンで、発売されたCDは全部持っている。日本公演ツアーの最中で、三日前に広島でコンサートがあるはずだった。わたしもチケットを買っていたが、突然、体調不良で中止になった。緊急入院しているという発表だった。

「壊れているのはここだよ」

マイクは自分の胸をたたいた。

「思うように吹けなくなったんだ。コンサートでは、昔の音声を流したりしてごまかしていた。いつからだろうな、自分の体の一部だったトランペットが、他人行儀な音を出すようになった。それじゃあ、熱くなれない。いや、おれの方が変わってしまったのかもしれないな。それで相棒に愛想を尽かされた。スタッフに話しても誰も理解してくれない。コンサートをやらなければ、莫大な違約金が発生する。でも、金のために吹くのはもうたくさんだ」

裸足に下駄を履いている。和風旅館の外出用の下駄を履いたままで、着の身着のまま逃げ出したのだろう。

「どうしてこんなところに？」

迷子になったにしては、中国山地の山間にあるこの場所は、広島の街から遠すぎる。

「おれの師匠のふる里が、この辺だと聞いていたんでね」

ヒッチハイクで、ここまでたどり着いたという。

「師匠からもらったんだ」

皺だらけの紙袋に入ったトランペットを取りだした。あちこち錆だらけで、相当な年代物だ。

マイクの父親は商社の社員で、マイクが子供のころは神戸で暮らしていたらしい。まだ日本語がよくわからなくて、友達もいなくて、ひとりで街角をぶらついているときに、軽快な音楽が聞こえてきた。チンドン屋だ。時代劇の扮装が珍しくて、音楽が楽しくて、ずっと後を追いかけた。

「港のそばの公園だった。演奏が終わって、トランペットを吹いていた

白塗りの侍が、おれに向かって深々と頭を下げた。そして、手を振った。帰れという合図だということはわかった。たぶん、おれが寂しそうな顔をしていたんだろうな。おれのためだけに、最後の演奏をしてくれたんだ。リパブリック賛歌、心が震えたよ。ちょうど夕暮れ時で、胸に滲み込んでくるような音だった」

　驚いたことに、そのチンドン屋は、吹き終えたトランペットをマイクに手渡したのだという。「リタイヤ」という言葉で、もう引退するのだと理解した。一期一会だったが、心の師匠になった。

「もう一つ、もらったものがある。神様のラッパだ。お守りなんだ」

　ジャケットの内ポケットから、銀色のシガレットケースのようなものを取り出した。茶色く変色した筒状のものが入っていた。それがイチョウの葉だと、わたしはすぐにわかった。

「行こう！　ラッパの神様に会わせてやるよ」

　マイクの手を引っ張って立ち上がらせると、軽四輪トラックの助手席に押し込んだ。

　しめ縄を巻いた巨木の前に立っていた。空を覆うように、黄金色の葉をつけている。マイクが地面の葉を一つ、拾い上げた。まるでラッパのように、イチョウの葉が筒状になっている。ニヤリと笑って、細い葉柄の先を片方の耳に差し込んだ。唇に人差し指を押し当てて、瞑目した。

「ラッパの音が聞こえる……」

　おもむろにトランペットを取り上げると、マウスピースを口に銜えた。風船のように頬を膨らませて息を吹き込む。ポンコツで、かすれたような音しか出ない。音程もどこか狂っている。でも、心に滲みるような音だ。哀しくて、切なくて、たまらなく愛おしくて、そして楽しい。

　わたしの爺さんのトランペットなのだ。楽団でトランペットを吹いていたが、徴兵されて陸軍のラッパ手になった。自分の進軍ラッパで多くの戦友を死に追いやったのに、自分は捕虜として生き恥を晒している。

　少しでも人の気持ちを明るくするんだと、戦後はチンドン屋のラッパ吹きになった。肺がつぶれるまで吹いた。喉がつぶれるまで吹いた。引退したときは肺気腫がかなり進んでいて、数年後に風邪をこじらせてあっけなく肺炎で亡くなった。

　風が吹いた。まるでトランペットとコラボしているように、大イチョウの葉がざわめいた。演奏の音が大きくなる。テンポが上がった。聖者の行進だ。黄金のラッパがスウィングしながら降ってくる――。

【香淀迦具神社の大イチョウ】所在地は三次市作木町。樹高三十二メートル、樹齢は六百年と推定され、広島県の天然記念物に指定されている。県内第三位のイチョウの巨木だが、通常の扇状の葉と、ラッパ状の葉をつけるのが全国的にも珍しい。

まちの古本屋さん
どら書房
古書探索の旅に、お気軽にお立ち寄りください。

・無料本、百円本、50 円本などのコーナー。
　無料の漫画ルームもあります。
・地元のポストカード、新鮮野菜の店頭無人販売もやっています。
※九日市の開催日は定休日でも開店します。

●庄原市中本町 2-1-10　●定休日：毎週月・火曜日
●営業時間 :9:30~19:00　●TEL: 090(9913)3052
※広島銀行庄原支店の手前 (三次側から)※交差点角のまちなか駐車場が使用できます。

< 広告料 1/4 ページ 1 回 2,000 円 半年間 9,000 円 1 年間 1,5000 円 >

今月の3冊

どら書房の店主が毎月オススメ本を3冊選んでご紹介します。

「希望が死んだ夜に」

天祢涼 著　文藝春秋

中学生の少女が同級生の少女をロープで絞殺、ショッキングな事件で開幕する。刑事の大人としての視点と、殺人犯として逮捕された 14 歳のネガの視点で物語は進行する。刑事が、14 歳の少女の気持ちに寄り添う努力を重ねることで、事件の真相が徐々に見えてくる。そして、いつの間にか思春期の少年に戻って、ネガを応援している自分（読者）がいる。

逆境から抜けだそうとした2人の少女。貧困家庭という社会的なテーマを扱いながら、少女たちの清々しい「青春」が描かれている。純粋な友情が描かれている。「社会派青春ミステリ」、帯に書かれた宣伝コピーは大げさではない。自分で確認していただきたい作品である。

「無限振子」

Lobin H. 著　協同医書出版社

自閉症（広汎性発達障害）にはいろんなタイプがあって、現在では、線引きできないスペクトラム（連続体）障害として捉えられている。だから、自閉症スペクトラム（ASD）。ASD の患者には認知的な情報処理に長けている人も少なくなく、国家試験に合格して、特殊なスキルが必要な職業に就く人もいる。

著者の女性（日本人）は、自閉症には最も不向きである精神科医となるが、やがて結婚生活と共に破綻、最終兵器（自殺）を発動する。それが不発に終わることで、彼女の ASD がようやく周囲に認知される。過酷な体験が両極端な 2 つの仮面人格を作り出し、その間で振り子のように揺れる人生――。

「犬夜叉」

高橋留美子 著　小学館

「うる星やつら」「らんま 1/2」等々、描く漫画はすべて大ヒットする驚異の 10 割打者、高橋留美子の代表作。あらゆる願いを叶えるという宝玉、四魂の玉を巡っての冒険譚を描いている。犬夜叉は妖怪と人間との混血で、半妖と呼ばれて蔑まれている。四魂の玉で本物の妖怪になることが目的だ。犬夜叉のかつての恋人、巫女の桔梗の生まれ変わりである日暮かごめがタイムスリップして、犬夜叉と行動を共にする。

「ドラゴンボール」と「ゲゲゲの鬼太郎」を合わせたような面白さ、と書けば、両作品のファンにしかられるだろうか。登場する妖怪が多彩で魅力的。展開はシリアスなのだが、ツボを押さえた笑いも健在。全 56 巻。

どら書房 ≪貸本屋システム≫

・店内で販売した本は、どら紙幣 (店内専用通貨) であれば半額、現金であれば 3 割で買い戻します。※破損や汚れがあれば値引

・書籍購入⇒読了⇒どら紙幣と交換⇒新たな書籍購入、貸本のような感覚でご利用ください。

どらくろ俳壇

秋の暮小石を置けば猫の墓　近藤 昌平

補聴器や牧に虫の音聞きに行く　原 博己

新酒より明日の活力貰いけり　片岡 正人

阿字観や瞑目すれば秋深し
（禅宗の座禅に匹敵するのが真言宗の阿字観です）　隆愚

猫の耳感度良好星冴える　赤川 冬人

※投句を歓迎します。

投稿＆寄稿

「バック・パス」　M・A

カープは二連覇を達成して、実りの時期を迎えたが、Jリーグのサンフレッチェは開幕から故障者続出で、未だに降格圏でもがいている。ここ一番では必ず競り勝っていたチームが、すっかり勝負弱くなってしまった。

勝たなければというプレッシャーが負の連鎖になって、選手の動きを硬くさせている。個々の選手の実績やポテンシャルを視れば、降格圏にいるようなチームではないのだが、チームとしての勢いが出ない。団体競技の難しさだろう。逆に言えば、日本代表がいないチームが連覇できたのも、チームとしてのまとまりがあって、戦術に優れていたからだと言える。

すっかり人気スポーツになったサッカーだが、私が子供の頃はマイナーな競技だった。一番人気は野球だが、小学生ではまだ早いので、ソフトボールをやっていた。地域対抗の大会があったように記憶している。

サッカーは冬のスポーツだった。体育の授業で、二つのチームに分かれて試合をする。人数も関係ない。ルールもよくわかっていない。ボールを追いかけていれば、体も暖まってくる。先生も、ただ見ていればいいのだから楽ができる。

敵味方関係なくわらわらとボールを追いかけていては、さすがに身動きが取れなくなるので、とりあえず攻撃陣と守備陣に分かれることになる。運動能力の高い連中が攻撃で、劣る方が守備。かっこいい方とどんくさい方、子供の世界は残酷である。私はどんくさい方で守備担当。

子供の体育教育にはいささか異議がある。早生まれの者はどうしても体格や身体能力が劣っている。三月生まれと四月生まれでは一年近くも差があるのだから当然だ。それを同列で競わせるのだからフェアではない。

恨み言はこれくらいにして、私の前にボールが転がって来た。凄い勢いで、敵陣が迫って来る。脳裏にアイデアが浮かんだ。すぐ後ろにいるゴールキーパーにボールを渡せば安全になるではないか。今ではそれがキーパーへのバック・パスという技術であることを知っているが、そのときは自分で思いついた。

ゴールキーパーにボールをパス、したつもりが、きちんとキックできなくて、とんでもない方向にボールが飛んでしまい、ゴールラインを超えた。

「おまえ、どっちの味方だよ」

「サッカーのルール、知らねえのかよ」

非難轟轟である。自分の意図を説明することができなくて、周囲の冷たい視線に耐えていた。哀しい想い出だが、自分のアイデアを実行に移した勇気を、今ではちょっぴり誇らしく思っている。

特別寄稿

「趣味で始めた土鈴作り　三十六年を終わって」（後編）

冨久光

初めて土鈴を手にしたときの感動を、一人でも多くの人に伝えたい、知ってもらいたい、そんな、たわいない思いから、土鈴の魅力の深みにのめり込んだように思う。この庄原だけでなく、県北の何処を歩いても、どこからともなく土鈴の音色が聞こえてくる、そんな風になればいいなあ、自分の中で夢が大きく膨らんだ。そのためには、「一万人の人に土鈴を贈ろう」目標が自分の中で固まった。鴉が鳴かぬ日はあっても土鈴を作らぬ日はない。それぐらい熱中した。作った土鈴は、音色のよいものから誰彼となく貰っていただいた。さまざまな記念品として、纏めて贈ることもあった。

土鈴の音色には不思議な魅力がある。幾万の土鈴を作っても同じ音色はない。その微妙な音色の違いが作る者を熱中させる魅力の一つなのかも知れない。「同じ形の土鈴ばかり作って、飽きないですか。」よく言われたものである。遠く縄文弥生に作られた飾りっけの無い土鈴も、今日のように、さまざまな形の彩色を施された土鈴も、元はと言えば土で作られた鈴に変わりはないのである。土鈴には、言葉で表現できない神秘な響きが秘められているように思えてならない。

十五年間、丸鈴だけを作り続けたことが、私の創作土鈴の基本だと思っている。私の土鈴作りには、もう一つの大きなメリットがある。土鈴を作る、ということは、無心無欲になることである。一日の佳いこと悪いことみんな忘れることができる。唯一のストレス解消法でもあった。

平成九年、庄原手作りの会、総勢八人が尾道の持光寺で握り仏作りの体験をさせてもらった。不器用な自分には、仏の顔がスフィンクスの顔になってしまった。礼状に、「百個の握り仏を作ってみます。」と添え書きした。私は、「器用ですね」と言われるのが嫌いである。実際に百個作った。見た目に単純な物ほど、奥の深いことを実感する。

七十個ぐらい作ったときだった。この手法で梟の表情が作れるかもしれない、閃くものがあった。それから、梟土鈴を作り始めた。縁あって福山市に在住の日本野鳥保護委員の梶野さんを知る。ある日、連絡を受けて保護飼育されていた梟に逢いに行った。梟は放鳥直前に成長した四羽だった。カメラを持って行ったが、写真に頼る気持ちを捨てた。梟が飼われている小屋に入れて貰い、しばらくの時間を梟と向き合った。その時の梟のさまざまな仕草、表情が私の梟土鈴の原点である。

梟土鈴は、無限に作れる、無限の表情がある、どんなに作っても終わりはない、それくらい、私にとって、梟は無限の可能性を感じさせる第一級素材なのである。大きさは八・六キロ、高さ四四センチの大きな梟土鈴を作ったことがある。四個作って一個だけ成功した。朝日新聞がギネス級の梟土鈴だと写真と共に紙上で紹介してくれた。九年前までは二キロ、三キロ級の梟土鈴も沢山作った。

無限の可能性を感じて、作り続けた梟土鈴も、平成二十年のある日、作り並べた梟土鈴の表情が異様に暗く、憔悴した表情であることに気がついた。気づいたときは、相当の重症だった。修復は困難と感じた。悩み、限界を感じた。土鈴に思い残すことは無いが、こんな惨めな思いで終わりにしたくない、迷いは四年間続いた。私の梟土鈴は私の表情そのものではないか、と思った。自分の生活を見直すことから始めねばと思った。数年来心身の疲労と共に、眠れない日が続いていた。梟土鈴に集中するために、身辺整理を始めた。

丘陵公園での、葉っぱの土笛体験教室から身を退かせてもらった（音階が整わぬジレンマもあって）。次に、長年関わってきた女流文学者、岡田美知代研究からも身を退かせてもらった（私の及ばぬステージへ進んでいるという実感もあって）。

その後も、首の痛み、右手の痺れ、指の関節の痛み、頑固な不眠に悩まされた。自分で鬱病を疑い、精神科へカウンセリングの予約を入れたこともあったが、数時間後にキャンセルした。頸肩腕症候群で同じ症状に

苦しんだ過去を思いだしたからである。平成二十六年三月一日から六月二十日まで日曜祭日を除きほぼ連日、接骨院で通院治療を受けた。

その甲斐あって、新しい目標に向かうことができた。テーマは、丸みの梟、丸輪の台座に梟を円座に並べた梟土鈴である。丸く、ふくよか、復活を願って作った。これまでの手法は、中芯に紙玉などを使って作るという、半手捻りだったが、七月後半からは完全手捻りで作った。三十三年目にして初めて作ることが出来たのである。

今年で三十六年の歳月を土鈴と共に歩むことが出来たことを感謝している。

私の拙い作品を日本土鈴館に展示くださり、いつも暖かく見守ってくださる日本土鈴館長、遠山一男先生。土鈴そのものに疑問を持ち始めたとき、奥深い土鈴の世界に目を開かせてくださった「神戸土鈴友の会」の皆様。私の土鈴に格別の関心を寄せていただいた福山市の土鈴愛好家、田中土鈴館様。みなまさのご厚情に感謝しています。

三十六年間、あたたかく支え励まして頂いた方々に、心からの感謝を込めて、厚くお礼申し上げます。有難うございました。

どらくろあ 掲示板

地域のイベント情報やメンバー募集など
情報掲示板です。

ー 硬式テニス参加者募集 ー

MTEC (Miyoshi Tennis Enjoy Club)
場所：三次運動公園の屋内＆屋外コート
・火曜日（9:30 ～ 12:00）
・水曜日（9:30 ～ 12:00）
・土曜日 (10:00 ～12:00)
連絡先 : 中川 (☎080-5610-2376)

《情報＆原稿を募集します!!》

●仲間募集　●教室＆講座案内
●イベント情報　●あなたの大切な本の紹介
●ボランティア・ライター（現地記者）募集！
※応募先はどら書房・赤川まで。
掲載は無料です。

どらくろあ ホームページ

バックナンバーも掲載しているので、ダウンロードしてお楽しみいただけます。
http://shobara.wix.com/dorakuroa

郷土史講座「木のはたらき～木の心を知る～」
口和郷土資料館開設 40 周年記念企画

講師：**伊藤之敏**　前庄原市文化財保護審査議会会長
森林生態調査研究所理事長

日時：**11 月 19 日（日）10 時半から12 時**　場所：**口和郷土資料館ロビー**
主催：**庄原市口和郷土資料館（庄原市教育委員会）・口和郷土資料館後援会**
問合せ：**口和郷土資料館（広島県庄原市口和町永田 9 ☎0824-87-2230）**

編集後記

◇カープのクライマックスシリーズは残念でした。でも、今シーズンも大いに楽しませてもらいました。赤ヘル依存症になっていたので、これからは自分で楽しみをみつけないと（苦笑）。だけど、日本一になるまで連覇を続けてほしい。サンフレッチェも頑張れ！
◇ツキヨタケ、確か夜に発光するキノコでしたね。中毒は怖いですが、肉厚の触感を味わってみたいものです。
◇寒くなってきましたね。飼い猫のドラマの毛もふかふかの冬毛。寝るときは足元にもぐりこんで、アンカがわりになってくれます。でも、腹が減ったと早朝に起こされます。布団から出るのが辛い季節になってきました。

発行：どら書房
〒727-0012
庄原市中本町 2-1-10
☎090（9913）3052（赤川）
e-mail：touzin@sannet.ne.jp
年間購読料：2,000円（郵送費込）

誌面デザイン：ROUTE183
協賛：九日市愛好会

第202回　しょうばらくんちいち

「庄原九日市」

平成29年　11月9日（木）9：00～13：00

庄原九日市とは？

天正年間（440年前）に物々交換で始まった市（いち）。
昭和年代の戦争で途絶えていた市を、市街地活性化ボランティア活動として空き店舗などを活用し2001年に復活。

TOPICS

★市民ギャラリー「アート多愛夢」
➡布で繋げるキルトフレンド作品展
11月8日（水）～10（金）10時～16時

★どら書房
➡月曜日と火曜日はお休み

★風龍
➡九日市スペシャル・餃子200円

★楽笑座で「まかない食堂」「うた声喫茶」開催

★『なでしこ』　着物類リサイクル市

出店配置図

❶ お休み

❷ ギャラリー三村

❸ 佐藤食販
とらぢ
二八そば加工所
アーミュシュ
さだっさ
リトルマーメイド
健康企画グループ

❹ なでしこ

❺ ちくちくはうす玉手箱
工房アム　郷屋
かぐや姫　椰家

❻ めだかの学校　黒田
ROOM　OF　KEIKO
やまのおみやげや

❼ スプレモ

❽ タツミ矢
上貝

❾ まなべ商事

❿ 克國水産

⓫ 前場衣料

⓬ よりんさいコーナー

⓭ 山本水産
くんえん工房 香豚
ハナビラタケ広島
庄之助栄泉

⓮ 開盛社

⓯ 佐藤園芸
砂田海産
田崎屋

⓰ お福
どんぐり～ず

出店申込みは、【毎月20日締切】コンパネ1枚スペース1,000円～　九日市愛好会事務局
〒727－0013　庄原市西本町2－1－10楽笑座内　TEL/FAX (0824)72-8285

ホームページ
http://www.kunchi-ichi.jp